

望月真澄著『法華信仰のかたち その祈りの文化史』

(大法輪閣)

三 輪 是 法

人は祈る。祈りには願いがあがる。人びとの願いが祈りとなるとき、そこに信仰が生まれ、その営みは時代の精神史として幾重にも積まれて、文化を形成していく。日本の歴史において、仏教の信仰はまさに文化形成の一翼を担った。ことに法華信仰は、近代でさらに庶民に広く浸透し、現代まで引き継がれている。本書は、そうした法華信仰の中枢に位置する日蓮仏教にスポットを当て、日蓮仏教がもたらした様々な祈りの特色を明らかにしていく。構成は次の通りである。

序 章 法華信仰とは何か

第一章 日蓮聖人の法華信仰

第二章 法華教団の歴史と伝統
第三章 法華信仰の諸相
第四章 名僧・信徒の法華信仰
第五章 守護神と加持祈祷
第六章 法華信仰の文化と宝物

著者は序章でインドから中国、そして日本における法華経の伝播史を一瞥し、第一章第二章で日蓮聖人から近代まで連綿と続く日蓮教団における法華信仰史を確認する。

本書の中心は第三章からの展開にある。江戸近世に始まる祖師信仰に話をはじめ、日本各地に波及した法華信

望月真澄著『法華信仰のかたち その祈りの文化史』(三輪)

仰を追いかけ、現代に引き継がれているお題目講などの様々な信仰形態や法華信仰の霊場にまで内容が及んでいる。

第四章では日興・日親・日朝の三師にスポットを当て、その法華信仰にみる生き様を取り上げる一方、滅後に生まれる三師への信仰、忠臣蔵でおなじみの吉良上野介家の法華信仰、江戸大奥の法華信仰、不受不施派僧侶への信仰や身延山信仰というように、世間における法華信仰の様相を描き出す。

第五章では法華信仰の特徴でもある守護神信仰や日蓮宗の祈禱について解説し、第六章では、著者の独擅場である、法華信仰の文化遺産とも言える日蓮宗の宝物について述べる。

本書を通読してわかることは、全章に渉る資料の多さである。第二章の教団の歴史を物語るときには、寺院に伝わる文書を現代語訳して用い、さらに実際の資料の写真を掲載するといった、実に丁寧な紙面構成になっている。これは、従来用いられてきた歴史資料に加えて、著者自身が、日本国中の法華系寺院を実際に歩き回って収集した史料を駆使した結果である。このように法華信仰の諸相をビジュアル化していく手法は、著者だからこ

そ可能だといえるだろう。

家永三郎は次のようにいう。

日本の文化的伝統にたいする無関心と忘却とは、私たち現代人の文化的創造活動を根のないものにしてしまう。歴史を媒介としない、空虚な創造というものはありえないからである。ゆがめられない真実の追究という態度に立つ日本文化史の使命はそこにあると思う。(『日本文化史』、岩波新書)

本書は、日常にあたりまえのようにとけ込んだ法華信仰という文化を、私たちに改めて認識させ、さらに新しい知識を与えてくれる。この日本文化へのガイドブックで、ぜひ日蓮仏教の足跡を巡る旅に出かけられたい。そして新たな文化創造の旅へ。